

今まで沈黙を保っていた小泉純一郎元首相が、とうとう麻生太郎首相の郵政民営化に関する発言を批判し、定額給付金特例法案の衆院再議決に賛成しない考えを表明しました。

この発言に、自民党執行部は、再議決の方針を強調して沈静化に努め、元首相に近い議員達も「景気対策が重要だ」として造反の動きは示していません。しかし、党内には、問題発言を繰り返す麻生首相の下で衆院選を戦うことを恐れる空気が漂い、これを代弁した元首相の発言は、給付金特例法と平成21年度予算の成立以降、「麻生降ろし」につながるものと思われます。

夏目漱石の「写生文」に

「写生文の存在は近頃ようやく世間から認められたようであるが、写生文の特色についてはまだ誰も明瞭（めいりょう）に説破したものがおらん。元来存在を認めらると云う事はすでに認められるだけの特色を有しているという意味に過ぎんのだから、存在を認められる以上は特色も認められた訳に相違ない。しかし認めらると云うのは説明されるとは一様でない。桜と海棠（かいどう）の感じに相違のあるのは何人も認めている。その相違を説明しろと云われるとちょっとできにくい。写生文と普通の文章の差違は認められているにもかかわらず明かに道破されておらんのもこの理である。かの写生文を標榜（ひょうぼう）する人々といえども単にわが特色を冥々裡（めいめいり）に識別すると云うまでで、明かに指摘したものは、今日に至るまで見当（みあた）らぬようである。虚子（きょし）四方太（よもた）の諸君は折々この点に向って肯綮（こうけい）にあたる議論をされるようであるが、余の見るところではやはり物足らぬ心持がする。余の云う事も諸君から見れば依然として物足らぬかも知れぬ。しかし云わぬより参考になると思う。」

という行があります。

これを各紙の言う「元首相発言余震続く、反発と共感、4月以降に影響も」に当てはめると、

「自民党内部の麻生降ろしの存在は近頃ようやく世間から認められたようであるが、自民党内部の麻生降ろしについては、まだ誰も明瞭に発言したものがおらん。」

となり、

「元来麻生降ろしの存在を認めらると云う事は、すでに認められるだけの自民党の深刻さを有しているという意味に過ぎんのだから、麻生降ろしの存在を認められる以上は、自民党の深刻さも認められた訳に相違ない。」

さらに、

「しかし、認めらると云うのは、総理が退陣することとは一様でない。麻生内閣の政策と国民の求める政策に相違のあるのは、内閣支持率も認めている。その相違を説明しろと云われると自民党内部ではちょっとできにくい。麻生内閣の政策と国民の求める政策の差

違は認められているにもかかわらず、明かに道破されておらんのもこの理である。」
となり、正に現在の自民党内のドタバタを「写生文」にするとこうなると思います。

今回の元首相発言は、そのタブーを破るきっかけになったのではないのでしょうか。

元首相の発言について民主党の内部では「私たちの声を代弁してくれている」と評価し、参院で審議中の定額給付金の関連法案について「少なくとも元首相のロシアからのお帰りを待って採決をしていけばいい」と語っているそうです。しかし、今では元首相の発言とは関係なく、定額給付金の関連法案については野党も参院で否決し、与党が衆院の3分の2以上で再可決するというシナリオは変わりません。与野党とも、緊急を要する経済対策法案に関しては、修正を行った上で、参院可決を図ることが、最も重要なことではないでしょうか。

産経：「小泉発言余震続く 反発と共感 4月以降に影響も(2/14)」

小泉純一郎元首相が麻生太郎首相の郵政民営化に関する発言を批判し、定額給付金特例法案の衆院再議決に賛成しない考えを表明したことで、政府・与党では13日も余震が続いた。自民党執行部は再議決の方針を強調して沈静化に努め、小泉氏に近い議員らも「景気対策が重要だ」として造反の動きは示してはいない。

だが党内には、問題発言を繰り返す麻生首相の下で衆院選を戦うことを恐れる空気が漂う。これを代弁した小泉発言は党内に根をおろし、給付金特例法と平成21年度予算の成立以降、「麻生降ろし」につながりかねない。



衆院予算委で答弁する麻生首相



自民党本部で行われた「郵政民営化を堅持し推進する集い」

中央日報：「麻生内閣支持率、10%台に急落」(2/14)

日本の政権党、自民党が行き詰まりの状態となっている。支持率が下落しつづけ、第一野党・民主党の執権を希望する国民が増えているからだ。多くの国民が、自民党の麻生太郎現首相より民主党の小沢一郎代表を次期首相に考えているぐらいだ。

朝日新聞が10日報じたところによると、先

急落する麻生内閣支持率 単位:%



資料:朝日新聞

週末、全国の有権者2036人を対象にアンケート調査を行った結果、「麻生内閣を支持する」という回答は14%だった。先月の19%より低く、首相就任後の最低値。

「麻生内閣を支持しない」という回答は67%から73%に増えた。自民党に友好的な読売新聞の調査でも麻生内閣支持率が初めて10%台(19.7%)に落ち込んだ。NHKの調査では18%だった。日本で内閣支持率が10%台なら、首相は衆院を解散し、総選挙を通して首相交代を行うべきだ、という国民の政治的な意思が示されたものと受けとめられる。

<夏目漱石(1867-1916)>

小説家、評論家、英文学者。俳人(俳号は愚陀仏)。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町(現在の東京都新宿区喜久井町)生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(後の東京帝国大学)英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。



日経社説「首相の政権基盤を痛撃した小泉発言」(2/14)

小泉純一郎元首相の発言が、低支持率にあえぐ麻生太郎首相の政権基盤を痛撃した。

小泉氏は12日、郵政民営化に関する首相の一連の発言を「怒るというより笑っちゃうくらい、ただただあきれている」と厳しく批判したうえで「首相の発言に信頼がなければ選挙を戦えない」と強調した。

参院で審議中の定額給付金の関連法案についても「3分の2を使ってでも（衆院再可決で）成立させなければならない法案だとは思わない」と述べ、衆院の再可決で造反する可能性を示唆した。首相経験者が現職の首相をこれほど非難するのは、極めて異例のことである。

首相は当初、国会答弁で小泉内閣の総務相当時には郵政民営化には賛成ではなかったと述べたが、批判を受けて「民営化した方がいいと最終的には思った」などと答弁を修正した。郵政民営化の根幹の4分社化の見直しにも言及し、民営化推進派議員の強い反発を招いた。

小泉氏はこれまで沈黙を守ってきたが、自らの最大の実績である郵政民営化を巡って迷走する首相に、堪忍袋の緒を切らした格好だ。

首相の責任は重い。4分社化に疑問を示す一方で「内容についてこうしろああしろという立場にない」と語るなど、あいまいな点も多い。信念なき軽率な発言が、自民党内の混乱に拍車をかけている。

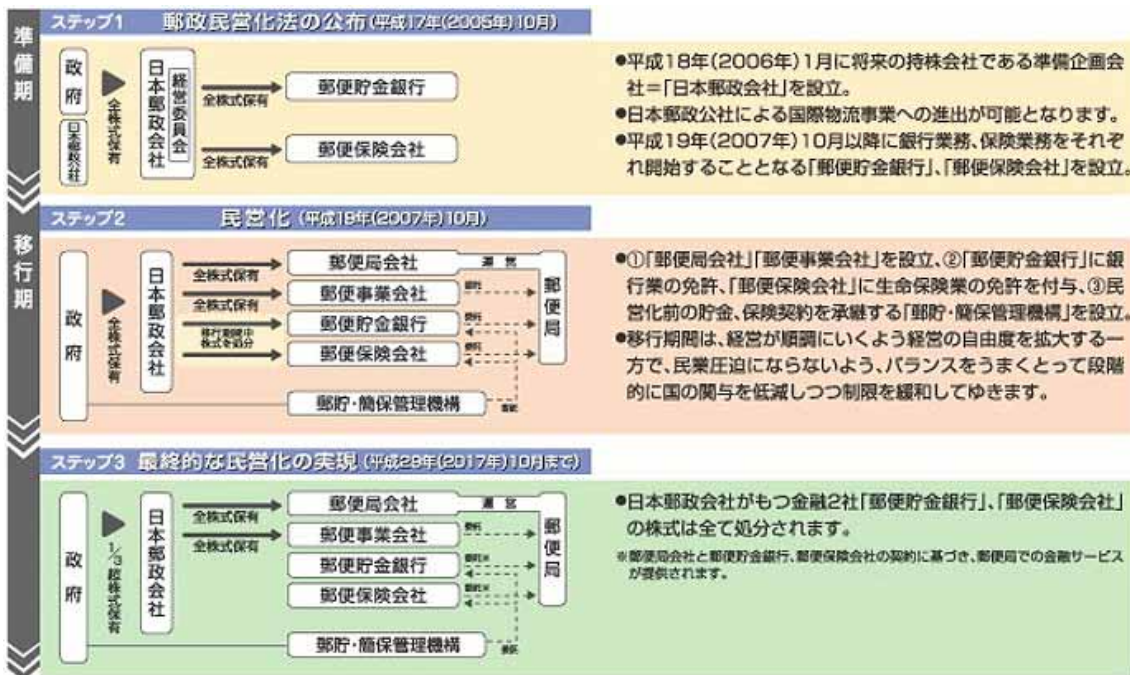
2005年の衆院選では、郵政民営化を訴えた小泉自民党が大勝した。公明党と合わせ衆院で3分の2を超える議席が麻生政権を支えている。一連の首相発言は、05年の郵政選挙の結果の正統性を疑わせることにもなりかねない。

私たちは09年度予算案と関連法案を早期に成立させたうえで、衆院を解散するよう求めてきた。郵政民営化の見直しに踏み込むなら、なおさら民意を問う覚悟が要る。衆院選の環境を整えるには、まず今年度第2次補正予算の財源の裏づけとなる関連法案を早く成立させる必要がある。自民党から16人が反対に回れば、再可決はできない。小泉発言をきっかけに、自民党内で定額給付金への慎重論が再燃する可能性が出てきた。定額給付金にかかわる部分は撤回して、関連法案成立を目指す柔軟姿勢があってもいい。

今年の秋までに必ず衆院選があるという状況で、来年度予算と関連法案成立後の衆院解散のタイミングを逃せば、自民党内で「麻生おろし」の動きが一気に強まる公算が大きい。解散か総辞職か。麻生政権は重大な岐路に差しかかりつつある。

< 郵政民営化 >

2007年10月に日本郵政公社が民営化され、持ち株会社である日本郵政株式会社と、その下に日本郵便（正式には郵便事業株式会社）、郵便局、ゆうちょ銀行、かんぽ生命保険の4つの株式会社が発足しました。



郵政民営化の流れ

天声人語：「政治の懐メロはごめん」(2/14)

昭和の歌姫、美空ひばりさんが没して20年になる。語り継がれるのは、病に倒れて1年後の88年春、完成間もない東京ドームでの復帰公演だ。腰の痛みを耐えての「不死鳥の熱唱」は深い感動を残した。

ひばりプロ制作部長だった森啓（あきら）さんは「音楽の精が、ひばりさんに乗り移っているかのようだ」、元ニッポン放送の池田憲一さんは「奇跡の復活とは到底信じられない迫力に、鳥肌の立つ想（おも）いでした」と著書に記した。久々の晴れ舞台に、やはりこの人しかいないと誰もが思った。

さて、この人の復活はどうだろう。小泉元首相が、郵政改革をめぐる麻生首相の迷走発言を痛烈に批判した。「怒るというより笑っちゃうくらい、ただただあきれている」と。与党の議員には色んな鳥肌が立ったことだろう。

ぶつ切りの断定で国民を幻惑した小泉節。久しぶりに聞くせいだろうか、よどみない節回しは、歌詞の間違えや音程のぶれに慣らされた耳に新鮮だ。定額給付金にも疑問を投げかけ、永田町では「麻生おろしか」と騒ぎになっている。

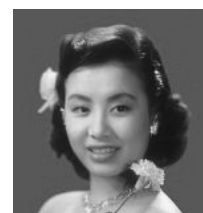
与党には、ワンフレーズに世論が踊った小泉劇場を懐かしむ向きがある。だが、格差の拡大、地方の衰弱、軽くなった首相の言葉など、劇場の残響も忘れ去るわけにはいかない。同じ歌に酔うほど、有権者は甘くはなからう。

へらへら、くねくねの麻生節も情けないが、説明不足の再来も困る。そもそも、引退して息子に譲るといふ人が政局の主役になるようでは、そこにある危機は乗り切れないだろう。「懐メロ」頼みの政治はごめんである。

<美空ひばり(1937-1989)>

歌手、女優。本名加藤和枝。横浜市出身。精華学園高等部卒業。愛称は御嬢（おじょう）。

数々のヒット曲を歌い銀幕スターとして多数の映画に出演した昭和の歌謡史を代表する「歌謡界の女王」である。



江利チエミ、雪村いづみとともに東宝映画『ジャンケン娘』に出演したことを契機に、「三人娘」として人気を博し、松竹・東映製作映画を中心に映画にも多数出演、歌手であると同時に映画界の銀幕のスターとしての人気を得、女性として初の国民栄誉賞を受賞した。

死後10数年を経た現在も尚、企画盤や未発表曲が定期的に発表、ビデオ上映コンサートも開催されるなど、永遠の歌姫として根強い人気を博している。

代表曲に『桑』『悲しい酒』『川の流れのように』など、主な出演映画に『悲しき口笛』『鞍馬天狗 角兵衛獅子』『リンゴ園の少女』『ジャンケン娘』などがある。

編集手帳：「余計なわきの甘さ」(2/14)

酒も菓子も好む甘辛の両刀遣いを、俗に「雨風(あめかぜ)」という。上方落語に由来する言葉らしい。きょうは普段の辛口一刀流を休み、奥様や娘さんから贈られたチョコを口に運ぶお父さんもいるだろう。

「精神の疲労は酒を求め、肉体の疲労は甘味を求める」と語ったのは作家の開高健さんである。職探しに、会社の立て直しに、精神も肉体も疲れた人が世にあふれ、「雨風」の一語がこれほど胸に響く2月14日もない。

「郵政民営化にじつは反対だった」と口を滑らせて小泉元首相に愛想づかしされた麻生首相も、雨風の吹き降る中にいる。就任当初の辛辣(しんらつ)な野党批判の「辛さ」はともかくも、わきの「甘さ」は余計だった。

首相はもっと言葉というものを...いや、ご本人が重々承知だろうからやめておこう。読者の皆さんもロマンチックな日に無粋な繰り言は望んでおられまい。

青春の傷跡がうずく工藤直子さんの詩「痛い」をひく。すきになる ということは/心をちぎってあげるのか/だからこんなに痛いのか。心をちぎって応援してきた麻生ファンも、この雨風は痛かろう...ああ、また言ってしまった。

<開高健(1930-1989)>

作家。大阪市天王寺区生まれ。大阪市立大学文学部法学科(現・法学部)卒。

壽屋宣伝部に中途採用され、PR誌『洋酒天国』の編集やウイスキーのキャッチコピー(トリスの「人間らしくやりたいナ」が有名)を手がける。

この時代に『裸の王様』で芥川賞を受賞、これを機に壽屋を退職し、執筆業に専念。

1964年、朝日新聞社臨時特派員として戦時下のベトナムへ。南ベトナム政府軍に従軍して最前線に出た際、反政府ゲリラの機銃掃射に遭う。

『輝ける闇』『夏の闇』『花終わる闇(未完)』の3部作は、そのときの凄烈な体験をもとに書かれている。

他に、『輝ける闇(毎日出版文化賞)』『玉、砕ける(川端康成文学賞)』『耳の物語(日本文学大賞)』などがある。



<工藤直子(1935-)>

詩人、童話作家。台湾朴子市生まれ。お茶の水女子大学文教育学部中国文学科卒業。

博報堂のコピーライターを経て、フリーに。

1983年『てつがくのライオン』で日本児童文学者協会新人賞、85年『ともだちは海のおい』でサンケイ児童出版文化賞を受賞。2008年『のはらうた』で野間児童文芸賞受賞。

息子の漫画家松本大洋との共作に『こどものころにみた空は』がある。



詩集『のはらうた』はシリーズ 80 万冊のロングセラーで、小学校や中学の教科書に載って子供たちに愛唱されている。

他に『あいたくて』『ねこはしる』『ふくろうめがね』『ゴリラはごりら』など。

余録：「元首相の政権批判」(2/14)

源平合戦などの軍記物では戦闘に先立ち、互いの大将が相手の非を言い立てる。あれを「言葉戦(ことばたたか)い」というそうだ。「源平盛衰記」には源氏方が平家方大将を「お前はもとは源氏の家来ではないか」とののしれば、片や「昔は昔今は今よ」と言い返す場面がある。

だから弁舌の力は当時の将たる者には欠かせない資質だったようだ。言葉戦いの最も古い例とされる天平時代の藤原広嗣の乱では、官軍に論破された広嗣の軍勢が戦わずして崩壊してしまった(藤木久志著「戦国の作法」講談社学術文庫)。

論戦といっても現代の議会政治など、それに比べれば穏やかなものだ。だがそれでも時には政権の命運がかかる「言葉戦い」が生じる。たとえば「最近の総理の発言に笑っちゃうくらいあきれている」という小泉純一郎元首相の発言である。

郵政民営化をめぐる麻生太郎首相の発言を痛烈に批判したばかりか、世評芳しからぬ定額給付金の衆院再議決に異を唱えた元首相だ。現政権の命運がかかる定額給付金だけに、それが抜き差しならぬ「言葉戦い」と受け取られたのも当然だ。

そもそも小泉政権下の郵政選挙で得た議席に依存する麻生政権である。なのに当の郵政民営化を否定するような発言をすることは何事か、それならば自分が与えた衆院の議席を使うな - - そうも聞こえる小泉元首相の言葉である。さて首相は「昔は昔今は今よ」と応じるのだろうか。

発言迷走のあけく、国民は郵政民営化の内実を分かっていなかったと天にツバするような見解まで口にした首相だけに言葉戦いの分は悪い。党内の将卒もにわか浮足立ち、風雲急を告げてきた「自民党盛衰記」である。

< 藤原広嗣 (? -740) >

奈良時代の廷臣。

天平9年(737年)朝廷において圧倒的な権力を誇っていた藤原四兄弟が相次いで亡くなると反藤原氏勢力が台頭し、天平10年(738年)親族への誹謗を理由に大宰少弐に左遷される。



藤原広嗣を祀る鏡神社二の宮

広嗣は左遷を不服とし、天平12年(740年)、弟の綱手とともに大宰府の手勢や隼人などを加えた1万余を率いて反乱を起こしたが、大野東人を大將軍とする追討軍に敗走し、最後は肥前国松浦郡で捕らえられ、同国唐津にて処刑された(藤原広嗣の乱)。

なお、新薬師寺の西隣に鎮座する「鏡神社」は藤原広嗣の怨霊を鎮めるために創建されたものである。

<源平盛衰記>

平家物語の異本のひとつ。48巻。著者不明。二条院の応保年間(1161年-1162年)から、安徳天皇の寿永年間(1182年-1183年)までの20年余りの源氏、平家の盛衰興亡を百数十項目にわたって詳しく叙述する。

平家物語と比較し、盛衰記は「読み物」としての様々な説話の豊富さから、後世の文芸へ与えた影響は大きく、さまざまな国民伝説の宝庫と言われている。

現在、平家物語と比べて入手困難であるが、江戸時代水戸藩の水戸彰考館編纂による『参考源平盛衰記』を底本とした源平盛衰記が幾つか出版されている。



源平盛衰記絵巻

<藤木久志(1933-)>

歴史学者。文学博士。立教大学名誉教授。専門は日本中世史。新潟県出身。新潟大学卒業。東北大学大学院修了。

近年、その活動範囲は歴史研究にとどまらず、いわゆる護憲派としても積極的に諸団体の運動に関わっている。

著書に『戦国社会史論 日本中世国家の解体』『豊臣平和令と戦国社会』『戦国の作法 村の紛争解決』『戦国大名の権力構造』『戦国史をみる目』『雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』などがある。

